

咸宜園と玖珠

甲斐素純

はじめに

玖珠町では平成七年度より、『玖珠町史』（B五版、上・下二巻、合計一七〇〇ページを予定）の編集を始めている。最初一年間の停滞はあったが、玖珠の歴史・文化を中心に全分野の資料収集・掘り起こしを進めているところである。

一昨年八月には全体会議を持ち、全分野にわたって各執筆者へ、それぞれのテーマで原稿作成の依頼を正式にしたところである。

監修者は大分大学教授の豊田寛三先生で、編集責任者をNHK学園古文書講座の講師佐藤満洋先生にお願いし、約六十余名の町内外の執筆者が、本年八月末日の原稿締め切りにむけて、懸命の努力をしているところである。

筆者は事務局として、また執筆の一員として多岐にわたるテーマをかかえているが、今回はその一つを紹介し、読者諸賢のご教示・ご指摘を賜りたいと考えている。

一、咸宜園を開いた広瀬淡窓

九州天領の中心地自田では、近世後期様々な文化・芸術が庶民の間でも広がりを見せている。森春樹（一七七一一一八三四）の『亀山鈔』には、儒学・画・和歌・狂歌・蹴鞠・立花・挿花・香・煎茶・点茶・碁などの分野に、人々の業績があげられて

いる。

こうした日田の文化的伝統の開花を象徴するものが、広瀬淡窓(一七八二～一八五六)とその一門であり後の私塾咸宜園であった。

「咸宜園」とは日田が生んだ日本的な大学者、豊後三賢の一人でもある広瀬淡窓が開いた塾である。これは「咸宜しき学園」という意味で、この塾に学ぶ者はそれぞれの個性・特技を持っており、それぞれに応じて天分を伸ばしていこうとする淡窓の、暖かい思いやりが込められた塾名となっている。

この精神・教育の基本は、淡窓の次の「いろは歌」にもよく表われている。

鋭きも鈍きもともに捨てがたし

錐きりと槌つちとに使いわけなば

淡窓は天明二年(一七八二)四月十一日に生まれ、名は健・字は子基、幼名を寅之助のち求馬もとめといい、淡窓・荅陽たいやう・遠思楼主えんしろう人とも号した。

家業は日田で代々諸藩の御用を勤める用達・商人で、屋号を「博多屋」といった。父三郎右衛門の頃には岡藩・杵築藩・府内藩などの御用を受けており、詩聖広瀬淡窓はこの広瀬宗家三郎右衛門の長男として生まれた。

日田は九州のほば中央部豊後国の西端にあたり、天領であった。筑後川の上流玖珠川・大山川・花月川などがこの盆地で一つになり、秀麗な山紫水明の美を形造っている。淡窓はこの自然美と、家庭的にも文藻ぶんそう豊かな父や伯父平八(俳人月化)などの影響を強く受け、幼少にして神童と呼ばれていた。

淡窓の偉大な事跡は、既にご承知のことでありここで改めて紹介しないが、実はこの玖珠と深い関係を有しているのである。

なおこれから記す内容は、淡窓自身が記した『日記』や、後年六十五才から数年を費して著とめあげた『懐旧楼筆記』（以下『筆記』と略称）などによっている（『増訂淡窓全集』所収）。

玖珠と淡窓が最初に関わるのは、五才の時の天明六年（一七八六）で、父母に連れられて叔父忠兵衛の妻「昆」の実家、玖珠町大字塚脇の桑野半右衛門の家に初入りをしている。家から七里、「幼時第一の遠行」であった。『筆記』には、「諸事茫昧ナリ。但龍門ノ瀑布ト鷹扇ノ玉ト分明ニ記シ得タリ」とある。

この時旅先きで見た「月出山」の山容が、日田からの眺めと大いに異なることを知り、驚いている。蛇足ながら淡窓はこの年まで、乳を飲んでゐる。

淡窓は生来病弱で、常に健康に留意する日々を一生送っている。文化二年（一八〇五）の春、二十四才の時正式に家業を弟の久兵衛（一七九〇〜一八七二）に譲り、自身は学問を持って身を立てるべく決心し、勉学に励んでいる。そして私塾「咸宜園」（最初は寺の一室を借り「成章舎」と名づけ、次に「桂林荘」で、その後「咸宜園」を設ける）を開き、子弟を教授するのである。

塾では入門者を「三奪」といい、年齢や入門時の学才、身分を奪われ、皆平等の立場で処遇された。そして「君は川流を汲め、我は薪を拾はん」といって、互いに切磋琢磨し合つたのである。

淡窓のひたむきな教育に対する情熱で、交通事情の悪い当時としては珍らしく、全国津々浦々から相前後して、門弟四千人と言われるほどの子弟が集まり、大盛況であった。そうしてこの中から、多種・多才な門人が成長し、日本各地で活躍している。

咸宜園出身の高名な儒者としては、佐伯の中島子玉、玖珠戸畑平川の劉君鳳（石舟）、豊前上毛郡薬師寺村（豊前市大字薬師寺）の恒遠醒（頼母）、日田の長三洲などがあり、その他蘭医の高野長英、明治の兵制を確立した大村益次郎（村田蔵六）、日本写真術の開祖上野彦馬、歌人の大隈言通、画家の帆足杏雨・平野五岳、総理大臣になった清浦圭吾、大審院長の横田国臣など、明治の近代化に貢献した者も多い。

咸宜園門人出身地別人員調 (大正六年七月調査)
 (淡窓圖書館)

大分縣内 一、六〇一 (豊後一、二八五 豊前二、三二六)

内譯

加賀國	播磨國	伊豫國	日向國	周防國	安藝國	攝津國	長門國	肥前國	肥後國	筑前國	筑後國
五四	五四	五五	六一	七一	九七	一三七	一五四	二〇七	二五七	二五八 (下毛・宇佐二郡)	四七二
										五五六	六
											郡別不詳但豊後
											大野郡
											國東郡
											直入郡
											速見郡
											宇佐郡 (豊前)
											海部郡
											玖珠郡
											大分郡
											下毛郡 (豊前)
											日田郡
											七〇一

薩摩國	伊勢國	信濃國	能登國	丹後國	陸奥國	土佐國	備前國	越前國	讚岐國	紀伊國	飛騨國	河内國	尾張國	備中國	參河國	近江國	石見國	和泉國	武藏國	出雲國	阿波國	山城國	備後國	越前國	美濃國	
八	九	九	九	〇	一	一	一	二	三	四	六	六	八	八	九	〇	二	二	二	二	二	二	三	三	三	三

越後國 出羽國 相模國 壹馬國 對馬國 因幡國 大和國 遠江國 丹波國 但馬國 佐渡國 若狹國 伊豆國 上野國 淡路國 美作國 伯耆國 常陸國 駿河國 伊賀國 上總國 志摩國 安房國

合計

六拾四箇國
 四千六百拾七人

一一一一一一一一一一一一一一一三〇

二、淡窓の玖珠来訪



～戸畑平川の旧道、淡窓もここを通る。この左側に合屋
劉家の屋敷と緑芋村荘があった～

淡窓は生来病弱ではあったが身の安康を得た天保十二年（一八四〇）の秋、五子の一人であった玖珠戸畑の劉君鳳（合谷左膳・

恵良の麻生伊織（彦国）のたつての勧めもあり、玖珠に遊んだ。この

伊織は淡窓の伯父平八の娘イサの次子で、彼女は日田隈町の医者相

良（館林）文之進に嫁した。つまり淡窓とは、従兄弟半にあたる。

伊織は淡窓初期の高弟で、伊織二十才の文化八年（一八一二）麻生

春畦の養子に入る。そしてこの人に、淡窓の妹那智（十八才）が二年

後の同十年十一月十七日に嫁している。妹が嫁してから三十年、淡

窓は今だにこの麻生家を訪れたことがなかった。伊織は淡窓の弟子

ではあるが、医術を秋月藩の戸原曆庵に学び、医者春畦の養子とな

る。

淡窓は十月九日 伸平（淡窓の弟）・伊織・範治（咸宜園三代青郎）

を伴い、自身は駕籠に乗りいよく玖珠へ向けて出発することにし

た。しかし朝になり雨が降ったので躊躇（ちゆうじゆ）していて時を過こし、夕方

四時に平川に着いた。平川では君鳳つまり石舟やその親族、日田の

僧平野五岳もここに前日より来て、路に淡窓一行を出迎えた。一行

はこの日大石嶺（おおいしね）・藪ノ坂（やぶのさか）・葉研坂（はがみさか）・代太郎峠（しろたろうとが）などを通ってきた。そ

の日は君鳳が家「緑芋村荘（りよくろふそんじやう）」に宿し、その時の詩が次のものである。

宿綠芋村莊 賦贈君鳳

綠芋村莊に宿し、賦して君鳳に贈る

三二一

故人遯迹寄烟蘿

故人の遯迹烟蘿に奇す

百里相思命駕過

百里、相い思いて駕を命じて過る

親把綿鉤供太白

親しく綿鉤を把り太白に供す

頻勞玉腕為東坡

頻に玉腕を勞り東坡と為す

寒溪遶舍秋声早

寒溪は舍を遶り、秋声早し

老樹藏村夜色多

老樹は村に藏り、夜色多し

晚境斯遊知幾度

晚境の此の遊び、知る幾度あるかを

不妨連日此婆娑

妨げず、連日の此の婆娑するを

○劉君鳳の家である綠芋村莊(屋号)に宿泊し厄介になることになったので、一首詩作して君鳳に贈ったときの詩。

門人である君鳳の隠棲しているもやのごもった薦のからまるこの家に世話になることになった。日田からここまでかなりの道のりだが、今度は君鳳ら門人たちのかねての誘いもあって駕に乗ってやって来た。彼らは皆、私を丁重に遇してくれる。まるでかの唐の詩人李白が綿の上着をその身に覆ったように。またかの宋の詩人蘇東坡が玉のように美しい腕を頻に勞り暖めてもらったように。綠芋村莊の外には水の涸れた谷川が遶り、早くも秋風や木の葉の散る音が耳を打つ。年輪を経た老樹はこの孤村をつつむようにそびえ、一段と夜の色を深くしている。六十もま近い晩年であって今度のような遊行が今後そうあるとは知れないと思う。それならば、連日のこの度のゆったりした放逸を楽しもう。

蒲次の平日は朝食の後同所を出発し、八九里ほど行き料理者の秋吉安造(旧問人)の家に立ち寄り、途中路上より魚返の滝を見て、広瀬(玖珠町戸畑)に至り昼食をする。この元立の子息三人は共に咸宜園に学び、長男崎太郎はのち自宅で私塾を開き、のち学務委員・戸長・村長にもなる。また末弟久米作は玖珠町小田に開いた孔来蔵(咸宜園)入門し、のち都講にまでなる。この「石園学舎」の塾頭になっている。窓はその後石田河原(九重町恵良と栗野の中間あたり)を過ぎ、「舟来」に達し伊織の家に泊っている。この時の詩が、次のものである。

舟来宿妹夫彦国宅

舟来にて妹の夫彦国の宅に宿す

採得夷清作恵和

夷清を採し得たり恵和を作す

看他英氣稍消磨

看る、他の英氣稍消磨するを

同巢鳩鵲良縁合

巢を同じくせり鳩と鵲、良縁にて合す

満室熊羆吉夢多

室に満つるは熊羆、吉夢多し

旅枕欹時山有月

旅枕する時、山に月あり

客舟来處水無波

客舟来る處、水に波無し

衾爐烘足油然臥

衾爐もて足を烘し油然と臥す

便是吾生安樂窩

便ち是れ吾が生の安樂の窩なり

○舟来にて妹なちの夫麻生伊織(彦国)の家に宿泊したときの詩。

夷えびすといわれた清しんも次第に漢化され覇氣がなくなつて穏やかな様子になつたように、青年時代からよく知つていた伊織を見てみると、往年の英氣は少しずつ消えてまろやかになつてきたように見てとれる。一家をかまえるなちと伊織は、まるで鳩鵲が一緒になると同じで、良縁というより他に言いようもない。しかも、今、この家、この室に看る一家には吉夢の通り男の子が多い。旅にあつて今枕して眠りにつこうとするとき、山には月が出てゐる。私の居る處は、地名も舟来かたこといい、舟が着くという意味だが静かで水波さえ見えない。團圓の中の衾きん爐ろも心持ちよく、何物にも妨げられずにゆつたりと眠りにつける。こゝは、いわば私の安心してくつろげるすみかのようなだ。

(「広瀬淡窓一族及び咸宜園と玖珠郡について」神戸輝夫著より)

この日の晩には淡窓の妻及び妹が、日田から後を追つて、舟来に来る。麻生家の座敷で淡窓ゆかりの人々が多数集まり、心を込めたもてなしに宴もはずみ、夜遅くまで賑わつたことであろう。

次の十一日には森からわざ／＼旧門弟の園田猪吉(鷹巢)が来訪している。この日伊織父子、寛三の先導で、松木を通り龍門寺の瀑布を觀に行つた。寺で持参もちさんの行厨こうちゆう(弁当)を開き、楽しい一時を過ごしている。この日は冷え込み、夜に入って先生は風邪気味になつてゐる。

十二日は伊織の養父春畦しゅんけいの招きで、その隠宅に行き饗宴を受けた。

十三日は雨が降り風邪もまだ癒えていなく、一日中伊織宅で閉じ籠つて養生した。次の十四日には前日からの雨も止み、日田への帰途につく。

さて淡窓一行はその途中森の三島宮を觀ようと、淡窓は輿、妻は馬に乗つて行く。これは井上秀泉(玉井秀之助)が、久留島侯に特別に願ひ出て許されたものであつた。秀泉は久留島家老家の一族で、恵良の井上家に養子に入つてゐた。

淡窓は、三島宮に参拝し、その感想を詩にしている。『筆記』には、「此ハ別館ヨリ上ニアリ、宮ト館ト、皆壯麗ヲ盡セリ、館ニ遊仙館・棲鳳楼等ノ号アリ、宮ノ傍ニ廻廊アリ、此ニ於テ行厨ヲ開ク」とある。

角山観森侯別館、謁三嶋宮

角山に森侯の別館を觀、三嶋宮に謁す

遊仙逸邁開 棲鳳峻嶒起

形勢占高峻 經營窮綺靡

導行有近臣 結伴是藩士

寧憚躋攀勞 要窺輪奐美

闕宮在層巔 肅穆陳簠簋

既降登山輿 還解入門履

鬻沸玉瀾翻 輝煌華表峙

神龍躡畫梁 靈獸夾金祀

徐行踏蘇苔 間坐藉蘭芷

偉麗固堪驚 清幽亦可喜

佳賞知難屢 帰途暫徙倚

嶺雲似留人 蓬勃擁鞋耳

遊仙は逸邁に開き 棲鳳は峻嶒に起つ

形勢は高峻を占め、經營は綺靡を窮む

行を導く近臣あり、伴を結ぶは是れ藩士

寧ぞ、躋攀の勞を憚らんや、輪奐の美を窺はんことを要むに

闕宮は層巔に在り、肅穆として簠簋を陳ぶ

既にして山に登り輿を降り、還りて門に入り履を解く

鬻沸として玉瀾翻り、輝煌たる華表峙つ

神龍は畫梁に躡し、靈獸は金祀と夾む

徐行して蘇苔を踏み 間坐して蘭芷に藉る

偉麗固より驚くに堪えん 清幽も亦喜ぶ可し

佳賞すること、屢たることの難きを知る 帰途は暫く徙倚せん

嶺雲は人を留るに似たり、蓬勃として鞋耳を擁す

○角山にて藩主森侯の別館を觀、その後、山腹にある三嶋宮に詣うでたときの詩。

森侯の別館である遊仙館はつらなつて開き、棲鳳樓は更に高く重なり合うようにして起立している。これらの別館の占める位置は高地、その建築は美麗としか言いようがない。私たちを先導してくれるのは主君の側に近く仕える人たち。しかも、その供として一緒に来てくれたのも森藩士たち。どうして高きによじのぼるその勞に恐れおおい心持がしないことがあるるか。別館の壮々美麗さを一目見たいと要めて来たのだから、その心を有難く受けよう。靈廟

ともいふべき三嶋宮は更に一段高いところにあり、境内は肅然とはしているが穏やかな感じがあり祭器が供えてある。目的の所まで登ってきたのだから輿を降りしばらくは廻遊し門を入り履をぬごう。目をやれば泉が湧き出し玉となつて次々と沸き上ってくる。きらめき輝く鳥居は時ち、神龍は美しく彩色されて梁のところに描かれ、霊獣は階段の両側の石畳に対坐している。ゆっくりと歩を進めて苔を踏みしめ、静かに香りの良い草の上に座ってみよう。この秀れて麗しい構築は驚きにたえないところだが、また今座っているこの場所の静謐な清らかさも捨てがたい。美辞麗句を重ねほめちぎるのは、そんなに何度も続けることができるものでもない。帰り道では急がず、ゆっくりと彷徨するよりに降りよう。遠くに嶺に掛る雲もあわてなさんなど言いかけていようだ。雲の湧き起るその姿は、鞋の端をだきかかえて離さないようではないか。

〔「広瀬淡窓一族及び威宜園と玖珠郡について」神戸輝夫著より〕

ところで、『醒齋日曆』（原漢文）には、三嶋宮及び別館について「三嶋宮及び森侯の別館、極めて壮麗。聞くに一邦之が為困乏すとは、盡し虚傳に非ざるなり」と記している。

なおこの三嶋宮（末広神社）には、淡窓のこの詩の掛軸が一本ある。また伊織の子孫宅（麻生太一氏所蔵）には、この詩の屏風が保存されている。十四日は平川に至り、先日の緑芋村荘に泊っている。

十五日平川を発し代太郎峠で大変な風雨にあい、淡窓は駕籠にゆられ気分を悪くしながら大清水で人家を借りて休み、丸薬を服して少し回復している。そして日暮れとなり、漸く帰宅できた。

淡窓は今度の旅行を、「此度ノ玖珠行ハ、事ニ役セラルルニ非ス、自己ノ遊観ノ為ナルハ、誠ニ二十年來ノ雅興ナリ。至ル處門生多ク、拝迎候間、共ニ慰勸ヲ盡セリ、殆ント巡見使ノ通行スルカ如シ、是レ過分ノコトナリ」とまとめている。



～三嶋神社(末広神社)拝殿～

以上の珍珠への二度目の旅の約四年後、天保十五年には府内、つまり今の^{大分市}にあった府内藩松平侯の正式招待を受けて、御前講義や藩校視察も兼ねて、九月一日淡窓は日田を出発する。

この時は前回と同じように舟来に来て一泊した。淡窓は「萬年楼二宿シ、春畦ヲ懐フノ詩アリ」といい、故人を偲んでいる。この春畦(医者)は伊織の養父で、先年つまり天保十三年二月九日、年七十で死去している。淡窓によると、「此人若キ時、藪孤山ノ門ニ入り、少シク文字アリ、篤ク性理ノ学ヲ信シタリ」とある。この藪孤山は熊本細川藩の藩校時習館の教授で、小浦の脇蘭室はその弟子である。

帆足万里の師脇蘭室の資料を集めた『脇蘭室全集』所収の「脇蘭室先生年譜」をみると、寛政七年(三十二才)の三月十八日には「珍珠の麻生春奎来見」とあり、十月十六日には春奎よりの来書があったことがわかる。また同九年十月十八日にも来書があった。このように春畦と蘭室とは孤山の相弟子としての交流があった。

九月一日淡窓は、伊織あてに詩を作っている。伊織は詩人でもあり、淡窓の「五子」の一人でもある。『宜園百家詩』という詩集の序文に、五子というのが出てくる。淡窓は詩作の上で特に秀でた門弟五人をあげている。そのまず第一は加藤亮で、第二は兄玉茂(伊織の従兄弟)、第三は劉蕪(君鳳・石舟)、第四は麻生美(伊織)、第五は中島大資(子玉)である。

この兄玉茂は伊織の父文之進の兄東嶽の末子である。茂の姉は珍珠中山田の島崎家に嫁し、その子研之介も淡窓に学び月旦評の六級に至る。のち父の後を継いで久留島藩の家臣となる。

さて、次の日は早朝舟来を出発し、松木を経て三里切塞(珍珠町大字岩室)に至って茶店で休息し、それより二里行き今宿(珍珠町大字日出生)に着く。ここには森藩の御茶屋があった。(現在は切塞と共に、自衛隊の演習場内)。

そしてそこから二里行き、並柳村(大分郡湯布院町大字川上並柳)庄屋宅で休息している。そこから別府へ出るために、金鱗湖の側を通り片山(別府市大字東山)を経て、また半里鳥居(同上)に至り、ここで日が暮れてしまう。また一里堀田に至り、近所を明りを求めて旅を続けた。そしてまた一里行き別府へ着き、旧門人の西光寺(別府市亀川)に至って一泊した。淡窓一行は

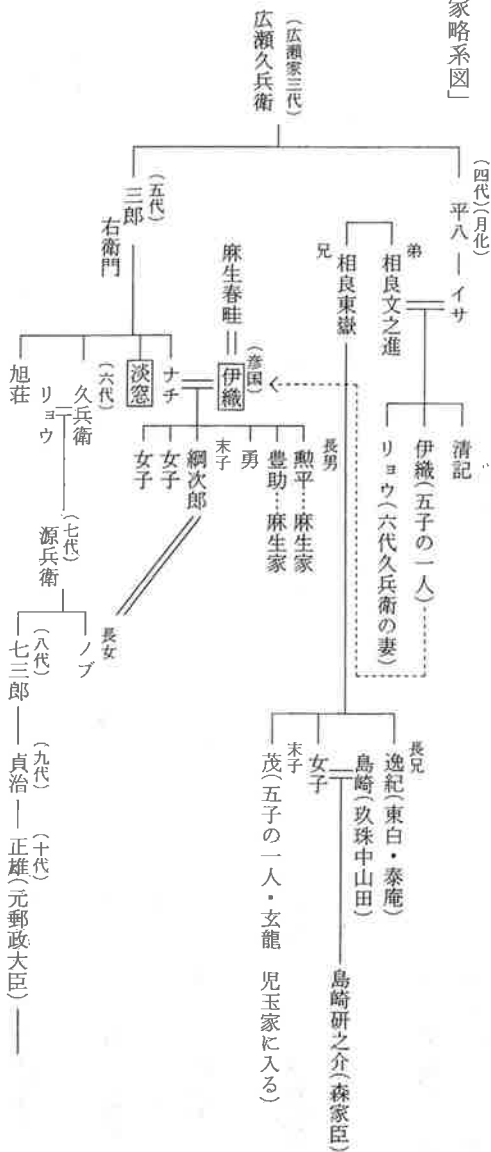
翌日船で府内に入り、そこで一ヶ月余り滞在し帰途に着く。

帰路は行きと異なり、別の正路を通り途中由布院の桑屋(湯布院町大字川西内徳野)の日野氏宅に一泊したりして、十月八日再び舟来で一泊する。

淡窓は翌年の弘化二年にも、府内侯のたつての願いで、再び府内へ出張する。五月六日自宅を出発し、塾を範治に頼み、今度は戸畑平川から森城下へ入り、塩屋平兵衛の家で一泊している。同行者は、麻生伊織・孔来蔵など六人。夜には旧門人の園田保(朝弼)が、酒肴を持って宿舎を訪ねてきた。

七日は卯時(午前六時)森を出発し、森藩の参勤交代道路でもある「八丁越」を通り、切塞で伊織と合流しそれより今宿で昼食をとり、並柳の庄屋溝口良八康喜の家で投宿している。それより正路を通り、府内に至る。

「広瀬家略系図」



三、咸宜園出身の偉人たち

『咸宜園出身八百名略伝集』によると、玖珠関係では麻生伊織(前述)・穴井祝次(孔珠溪、通称來蔵、小田に開いた「石園学舎」の塾生)・秋吉諭(樟陰)・崎太郎、戸畑の人)・麻生良策(伊織の長子で、のち勲平と称す)・同寛三(右田村の人)・同勇(伊織の二男)・同藤六(右田村の人)・同綱次郎(伊織の末子)・同主水(伊織の子)・秋吉珠陽(玄立の末子)・井上茂助(森の人)・大島熊太郎(豊後森家中)・小野頭司(魚返村の人)・同都一(頭司の弟)・佐藤郁次郎(森の人)・島崎研之助(中山田村)・森家臣・園田鷹巢(後述)・同鷹城(森藩儒官、幼名虎之助・通称扇吾、号を鷹城という。鷹巢の弟)・壇松之助(森領の人)・長野要人(恵良村の人、淡窓の従姉の子で叔父の外孫、のち玖珠で医を業とす)・日隈左近(右田村の人、麻生春畦の男)・僧法城(中山田村の人、陽照寺の住職)・方山牧之助(森領有田の人)・山田東一(元森藩士、通称隼之助、号は戸洲)・劉石舟(後述)・同冷窓・同耳松・同寅松(戸畑平川の人、共に石舟の子)、僧瓏然(山浦専徳寺の僧)が記載されている。

これら玖珠出身者の事歴について詳述するゆとりはないが、ここでは劉君鳳・園田朝弼についてのみ若干記してみたい。

(一) 劉君鳳(寛政八年一月二十日^(一七九六)明治二年五月二十九日^(一八六九)。七十四才)

十六才で日田の咸宜園に入塾し、非凡の才能と不断の努力により佐伯より遊学中の中島子玉(増太)と共に、宜園の双壁と称された。修学四年にして、文化十二年(一八一五)長崎へ赴き、学業研鑽すること十年、文政九年(一八二六)の秋学就^なって郷里戸畑平川に帰り、居を構え(「緑芋村莊」と命名)私塾を開き、子弟の教育に専念する。

天保十二年(一八四一)三人の子供(君平・寅松・耳松)の宜園入門と共に、居を日田に移す。嘉永元年(一八四八)君鳳既に五十三才、中央に於ける有識者と直接交流・研鑽の思い止みがたく、居を京都に移しかの地で私塾を開く。

更に安政元年(一八五四)には丹波国船井郡園部^{おんぶ}に私塾を開き、やがて園部藩々校「教先館」の教授に迎えられた。園部藩は二万九〇〇石で、元和五年(一六一九)小出吉親がここに入封したのに始まる。藩主の信任も篤く、没後は広大な墓地を賜わっ

た。

晩年の君鳳(六十九才)は、その非凡な才能と人柄の高尚さを朝廷からも認められ、学習院(幕末の公家の子弟のための教育機関)の漢学師に任命され、高貴の方々へ経書を講ずる光榮に浴することとなった。

君鳳の感激は、次の五言律詩にみることが出来る。



～君鳳の子孫、松田精一氏所蔵文書～
(玖珠町教育委員会提供)

廓唐重斯文、
几筵延末族、

△廊唐(朝廷)・斯文(経学)・几筵(講義のむしろ)▽

懷三吾聖德隆、
泣捧遺經誦、

△遺經(先賢の残した経書)・四書五経の類)▽

説經師傳在、
私意敢講張、

△講張(自分かつてに解釈をしない)▽

每逢深徹處、
低頭思念長、

△深徹(微妙なわかりにくい処)・思念(考え思う)▽

官學浴天恩、
餘慶思我祖、

△我祖(劉家の祖先)▽

春風吹淚痕、
飛作故邱雨、

△涙痕(感激の涙のあと)・故邱雨(故郷戸畑村に降る雨)▽

元治紀元甲子二月、始講經、於辟雍作、
學習院講師

劉蕤(朱印)

△辟雍(天皇の設けた大学)▽



～劉君鳳の墓～ (玖珠町教育委員会提供)

君鳳の墓は京都府船井郡園部町字内林にあり、墓地の入口にある「石標」は、「君賜墓地 劉氏、明治二年五月」とある。墓は三基。いづれも自然石にて、

(向って右)「靖雅劉先生之墓」(劉君鳳)

(中央) 「文淵劉先生之墓」(長子冷窓)

(向って左)「慈列瑞人綾野氏 (君鳳夫人)

妙生大姉福田氏」(冷窓婦人)

とある。君鳳と冷窓の墓の裏面には、広瀬青村(範治)の撰文並びに書になる墓誌が刻まれている。

同墓所はいつも清掃がゆきとどいており、今でもその徳を慕う地区の人々の心づかいが伺われる(『玖珠郡史談』第二十号所収「詩人・経学者・教育者劉君鳳」梅木幸吉著参照)。

(二) 園田朝弼(一八一九) 文政二年(一八一九) 明治二十四年四月九日・七十三才

諱は朝弼、字は士輔、通称を保といい、鷹巢・不時宜と号した。

天保四年(一八三三)八月十五日 十五才で、咸宜園に入門した。同十二年より嘉永二年(一八四九)に至る間、医学・儒学の研鑽のために秋月・肥前・肥後の名医・碩学を遍歴し、また長崎にも遊学した。

帰郷後、森藩々校「修身舎」の教授に任せられ、また家塾「学半舎」を開き子弟の教育に専念する。門弟は、一千余人といわれている。

明治の初め藩を代表して公議人として上京し、公議所(集議院)議員、特命定勤幹事を命ぜられ、特に議長大原重徳卿・参議

木戸孝允から厚く遇された。

明治二年（一八六九）版籍奉還の議起り、集議院が閉院した。中央政界からも在京の勧めがあつたが、固辞帰郷し権大参事として地元のために尽力した。同六年学務委員を命ぜられ、また京都師範学校教授や宇佐郡高家村で塾を構え、門弟の教育に当たった。

没する前日まで四十年間、一日の如く丹念に漢文にて日記を記す。これは朝粥の行動・性格・交遊・思想を知る格好の史料（直系子孫宅所有）であり、綿密な分析が待たれる。

三島神社の境内には、自然石で建てられた「不時宜先生の碑」と弟の「園田鷹城先生之碑」とがある。また墓は名草の園田家墓地内に、「不時宜府君墓」がある。（『中島五太追想録』昭和五十三年十一月、私家版参照）。

最後に、旧森藩領内及び現玖珠町関係の咸宜園入門者を列挙する。

玖珠町関係「咸宜園」入門者名簿（ただし、旧森藩領内の日田市有田地区・別府市鶴見・日出町頭成地区も含む）

入門年時	住所	氏名	年令	紹介者
文化一、廿八	玖珠郡戸畑村	合谷儀作		足立文哉
文化七、廿八	玖珠郡魚返村	魚返藤九郎		魚返利左衛門
文化一、廿八	久留島伊豫守内	佐藤郁次郎		草野直記
文化十、七	豊後国玖珠郡中山田陽照寺	狛法城		秋好俊太郎
文化九、七	豊後国玖珠郡魚返村	小野頭司		民章

文政 四、一三	文政 一、二四	天保 八、一五	天保 八、一四	天保 一、二〇	天保 三、二二	正、二六	天保 十、二三	文政 一、一二	文政 四、一四	文政 二、一七	文政 一、一七	文政 八、一五	文政 四、一九	文政 七、二五	文政 八、三一
玖珠郡小田村	中山田	森	森	中山田	森家中	森領有田郷羽田村	豊後国日田郡有田郷石松村	中山田村	豊後森家中	豊後森領	當国玖珠郡森町	有田郷諸留村方山	豊後玖珠郡山浦村	豊後国玖珠郡戸畑村平川	豊後国玖珠郡瀬戸口村
万德寺 釈正海	広妙寺 釈法梁	園田猪 吉	園田 仲	梅木 政太郎	嶋崎 仲	麻生 藤平	日野 文吾郎	島崎 研之助	大島 熊太郎	壇松 之助	専光寺 釈宣乘	高倉賢 吾	専徳寺 釈了冥	法蓮寺 釈哲鑑	河野留 八
一六	一三	一五	一五	一四	一六	一三									
恒遠雲平	梅木政太郎	佐々木十藏	佐々木十藏	嶋崎源仲	児玉茂	麻生良八	長春庵	児玉茂	升屋忠右衛門	壇 <small>兄</small> 七三郎	釈法雨	方山元泰	釈智寂	合谷此面	釈法城

天保 二、 一五	天保 一、 二四	天保 一、 二五	天保 八、 二四	天保 二、 一四	天保 二、 一四	天保 五、 二二	天保 一、 一三	天保 一、 一三	天保 一、 一三	天保 一、 一三	天保 五、 二二	天保 八、 二四	天保 六、 二三	天保 四、 二七	天保 二、 一八	天保 四、 二六	文政 一、 三
豊後玖珠	日田有田上手村	豊後国玖珠	豊後玖珠郡戸畑村	豊後国日田郡有田郷諸富村	玖珠郡平川	豊後玖珠平川	玖珠平川	玖珠平川	森、有田	豊後玖珠郡小田村	玖珠郡山浦村	豊後森家中	豊後速見郡鶴見	玖珠平川	玖珠郡岩室村		
小野都一	壇兵吉郎	积英從	积僧讓	長尾邨治	劉保吉	劉孝市	劉耳松	劉寅松	方山牧之助	穴井祝次	积賢嶺	玉井秀之助	直江大藏	合谷三郎	帆足代八郎		
一六	一五	一八	一九	十一	一二	一四	一〇	一三	一四	一七	二一	二二	一六	一三	一六		
鴻葦	諫山兵之助	积賢勵	积雲涯	日野文五郎	劉石舟	劉三郎	劉石舟	劉(劉君鳳)石舟	竺觀月	江田藤平	积懐道	園田猪吉	左孝治	麻生良作			

八、 嘉永 一七	一〇、 嘉永 四四	一〇、 嘉永 四四	三、 嘉永 一三	四、 嘉永 二七	全右	全右	二、 弘化 五	一、 弘化 五	八、 弘化 二四	七、 弘化 二六	四、 弘化 八四	四、 弘化 八四	三、 弘化 六四	一、 弘化 二八	一〇、 弘化 二六
豊後森	豊後森藩	豊後森藩	玖珠郡戸畑村	豊後玖珠郡森大庄屋	日田石松	日田石松	日田有田村	豊後日田郡有田村	豊後森久留島采女内	豊後玖珠郡中山田村	全右	森領豊後日田郡有田郷諸留村	豊後玖珠郡戸畑村	森領日田郡有田郷諸宣村	豊後玖珠郡小田村
木 付 正 甫	山 田 隼 之 助	木 付 春 潮	小 野 雅 人	大 谷 改 吉	矢 柄	法 律	壇 吉 郎	吉 田 次 三 郎	園 田 虎 之 助	島 崎 蘭 治	同 苗 儀 平 梓 市	方 山 牧 太 郎	秋 好 崎 太 郎	片 山 啓 七	武 石 石 藏
一五 木付伯陵悴	二五 山田又左衛門悴	一六 木付伯陵悴	一五 小野彦章悴	一二 大谷雄平孫	一四 浄徳寺悴	一六 浄徳寺徒	一六 壇兵吉郎弟	一四 吉田久平悴	一四 園田茂三郎悴	一七 島崎民部悴	一一	一八 方山玄甫悴	一四	一一 片山賢吾悴	一四 武石儀作悴
園 田 茂 三 郎	園 田 謙 吾	園 田 肩 吾	田 代 弟 吉	日 野 文 吾 郎	浄 徳 寺	浄 徳 寺	壇 兵 吉 郎	吉 田 久 平	園 田 茂 三 郎	児 玉 茂	野 田 又 五 郎	日 野 文 五 郎	孔 秋 好 玄 立 悴 藏	日 野 文 吾 郎	孔 菜 藏

八、 一七	万延 元	豊後玖珠郡小田村	橋 爪 保 二 郎	一四	高 田 益 三 郎
三、 二九	安政 二、 二七	玖珠郡戸畑村	秋 吉 久 米 作	一四	秋 吉 崎 太 郎
二、 二七	安政 二、 二七	豊後国玖珠郡山浦村	积 良 雨	一七	川 野 陸 之 助
二、 二七	安政 二、 二七	豊後玖珠郡小田村	武 石 敬 太 郎	一四	武 石 文 京
四、 八	安政 四、 八	豊後玖珠郡	孔 井 蘭 司	一四	武 石 文 京
三、 二八	安政 三、 二八	豊後玖珠四日市	积 法 山	一八	积 法 律
一、 二一	安政 一、 二一	豊後森領小寒水	小 幡 熊 太 郎	一四	諫 山 福 七 郎
一、 一五	安政 一、 一五	豊後森領小寒水	吉 田 雅 太 郎	一四	积 了 溪
一、 一五	安政 一、 一五	有田郷中尾村	吉 田 暉 旭	一六	积 了 溪
一、 一三	安政 一、 一三	豊後森有田郷諸富村	吉 尾 春 司	一四	积 了 溪
三、 一四	安政 三、 一四	豊後頭成町	积 雲 海	一七	賀 来 雷 吉
二、 二一	安政 二、 二一	豊後国玖珠郡小田村	橋 爪 秀 太 良	一四	合 原 掃 部
一、 二二	安政 一、 二二	玖珠郡戸畑村	秋 吉 貫 一	一八	秋 吉 崎 太 郎
一、 二二	安政 一、 二二	豊後森藩	島 銀 次 郎	一八	園 田 茂 三 郎
一、 一五	嘉永 一、 一五	豊後玖珠下塚脇	小 野 幸 平	一五	武 石 道 徹

明治三、二、四	明治三、四	明治二、一、二	全右	全右	全右	全右	全右	全右	全右	全右	全右	慶応三、二、五	慶応三、二、五	慶応四、二、四	元治五、二、一	万延二、八	万延一、二、二
玖珠小田村	本州玖珠郡平川	豊後玖珠郡小田村	同郡同村	同郡中山田	同郡小田村	玖珠郡	玖珠郡北大隈	本州玖珠郡戸畑村	本州玖珠郡小田村	本州玖珠郡四日市	本州玖珠郡小田村	日田石松邑	豊後玖珠満福寺	豊後玖珠教念寺	豊後国玖珠郡下塚脇		
道三	劉久吉	勝二郎	梅木勘左衛門	吉武吉右衛門	長野嘉左衛門	麻生文四郎	小野壽一郎	高橋善三郎	武石儀策	小幡熊太郎	秀太郎	大恵	釈洞達	釈三位	小野松三郎		
一、九	武石文敬粹	劉七右衛門粹	武石儀策粹	五四	三一	三六	二八	一九	三一	三九	二五	橋爪半兵衛粹	浄徳寺次男	二一	一五	小野祐一粹	
秋吉久米作	劉近之助	伝照寺積法道	全	全	麻生春畦	星野倉一兵衛	広瀬倉敬四郎	前川伊太郎	広瀬倉家四郎	武内宗兵衛	釈倉既成	竺僧云	恵美	大橋又三郎	衛藤季治		

濠田時代(明治十八年二月～同二十年十二月)

明治一八 二、二五	大分県豊後国日田郡羽田村	麻生行藏	一二	麻生円八
全右	〃	麻生高太郎	二七	麻生直右衛門
明治一八 二、二五	大分県豊後国日田郡石松村	森郭学	二十	伊藤藤衛門
明治一九 五、九	大分県豊後国玖珠郡士族	木下恒太	一三	井上卯治助
明治一九 五、九	大分県玖珠郡森村	原田一雄	一六	村上克太郎

諫山藪村時代(明治二十一年正月十三日～同二十五年四月)

明治二一 一〇、二二	大分県玖珠郡太田村二十三番地	長尾虎太	長尾宗二郎次男 一五年六月	麻生圓八
明治二五 二、一〇	大分県豊後国玖珠郡八幡村五八五	原田友太郎	原田治六長男 一八	宿利岩藏
全右	大分県豊後国玖珠郡八幡村五八一	宿利三郎治	宿利岩藏長男 一三	原田治六

勝屋講師時代(明治二九年五月～同年六月)

明治二九	東有田村	麻生美造	一五	麻生通蔵
明治二九 二、一四	大分県玖珠郡八幡村	田中源吾	一八	池田友吉
明治二九 一、二、二	大分県玖珠郡森町帆足	帆足清爾	一九	佐之瀬芳城
明治三〇 三、二	大分県日田郡東有田村	帆足和多三	一八	帆足十左衛門

(『玖珠郡教育文化史』より作成。ただし、『増補淡窓全集』下巻の入門簿より、大幅改訂をした。)

注

(1) 『日田・玖珠地域―自然・社会・教育』一九九二年三月・大分大学教育学部・所収

(2) 中野範編著・広瀬先賢顕彰会刊